1937 MIYAZAKI
2005 KUMAMOTO

連載 剣道具の製造工程、すべて見せます

続・日本がつくる剣道具

第四回 日本の名匠たち（後編）

構成 本誌編集部 写真提供 日本剣道具製作所
協力 三栗野眞也（全日本武道具センター）

技が集う場所――職人の交流の場として

宮崎県にある日本剣道具製作所には、かつて、全国各地から腕利きの職人たちが集まっていた。技を競い、語り合い、互いに学び合う。そんな活気に満ちた日々が、この宮崎県の製作所にはあったという。

「この製作所は単なる〝製作の場〟ではなく、〝学び舎〟でもあったんです」

そう語るのは、長年現場を見続けてきた古参の職人だ。昔の写真をめくると、そこにはこの地を訪れた全国の名匠たちの姿が映っている。その光景のなかには、剣聖・高野佐三郎の孫にして、防具づくりの名匠として名を馳せた故・浦和の鈴木謙伸氏の姿もある。鈴木氏は幾度となく宮崎を訪れ、日本剣道具製作所の職人たちと技を語り、腕を競い、心を通わせた。防具のあり方、素材の生かし方、縫いの美しさ――。そのすべてを語り合う時間が、製作所の空気をさらに深めていったという。そして、その隣には、若かりし日の新名博文氏（伝統工芸士）の姿もあった（新名氏については前号で紹介）。

時は流れ、風景は変わっても日本に残るこの工場は、今も静かに、伝統の炎を守り続けているのである。

故・浦和の鈴木謙伸氏と日本剣道具製作所の職人たち

案内人

川辺尚彦（かわべ たかひこ）

（株）日本剣道具製作所代表取締役
（株）全日本武道具代表取締役

昭和 55 年熊本県多良木町に生まれる。
多良木高校を卒業後、大学を中退し、武道具業界に入る。
平成 22 年、「全日本武道具」を創業。
平成 26 年日本剣道具製作所の代表取締役に就任。
平成 29 年自社海外工場を設立。
令和元年、内閣総理大臣安倍晋三より首相公邸へ招待を受ける。
世界市場に流通する日本製剣道防具 80%以上を製造。

創業 90 年、日本で唯一、すべての剣道防具を製作できる日本剣道具製作所の職人集団が、技の灯を未来へつなぐ

「この地こそ、原点」川辺氏が語る日本剣道具製作所の誇り

川辺氏がこの工場を語るとき、その口調は自然と熱が帯びる。

「宮崎県には、現存する日本最古にして最後の剣道防具職人集団の歴史が息づいています。地域としては１００年以上、私たち日本剣道具製作所も創業90年を迎えようとしています。伝統工芸士も実在し、この製作所そのものが日本文化の〝最後の砦〟ともいえる存在です。現在は約60名の職人が製作に携わり、その半数が20年以上の経験を持つ匠たち。50年を超える名匠もいます。

受け継がれているのは技術だけでなく、〝剣士への敬意〟と〝日本の美意識〟。縫い目の一筋、革の張り、面の曲線に至るまで、熟練の感覚と哲学が宿っています。製作所には木槌の音と職人の息づかいが響き、それが伝統のリズムとなって若い世代に受け継がれています。

これほどの規模で剣道防具製作を行なう場所は、日本剣道具製作所だけです。ここには剣道を支える道具の知識、技術、精神がすべて詰まっています。職人たちは日々、切磋琢磨しながら、未来への継承に力を注いでいます。全日本剣道連盟加盟の皆さま、全国の剣道家の皆さまに、ぜひ一度この地を訪れていただきたい。ここは、剣道を支える『ものづくりの聖地』です」

目立たぬ手、揺るがぬ技

日本剣道具製作所の職人に話を聞いていると、ひとりの職人が静かにこうつぶやいた。

「個人でつくる人は目立つけど、うちは会社だから私たちの名前が出ることは少ないんですよ。昔は技術を取られるのが怖くて、工場を見せない時期も長く続きました」

少し笑って、こう続ける。

「でもね、私たちは普通の職人さんの何十倍、何百倍もの防具をつくってきた。そのぶんだけ、手の感覚にも、仕事にも自信があります」

控えめに語るその言葉のなかに、積み重ねてきた年月の重みが感じられる。静かに息づく、伝統の製作所。幾千の防具を生み出してきた手が、今も一針一針、心を込めて動いており、その音は静かななかにも確かな力を宿し、時を越えて職人の魂を伝えている。

次回も、宮崎県・日本剣道具製作所に息づく職人たちの姿に目を向けてみる。